

日本生まれ日本育ちの外国人生徒のキャリア教育

—日系南米人青年へのインタビュー調査からの示唆—

中村夏帆（東京学芸大学教職大学院生）

1. 研究の目的

外国人集住地域の中学校で日本語指導を担当している。日本生まれや幼少期に来日した外国人生徒（以後、日本生まれ日本育ちの外国人生徒）が8割を占めるが、将来的にも日本で暮らす可能性の high かれらへのキャリア教育が課題となっている。高校進学のためのガイダンスや地域で学習支援を行う団体の報告もよく耳にするようになった。しかし、キャリア発達を「自己の知的、身体的、情緒的、社会的な特徴を一人一人の生き方として統合していく過程」（中央教育審議会2011:16）」ととらえるならば、そのキャリア教育は高校進学のみならず、その先の社会参画をも視野に入れる必要がある。そこで、本研究では、日本生まれ日本育ちの日系南米人の青年にこれまでの半生と職業意識に関するインタビューを行う。そのデータを、年齢による社会的な出来事の意味・役割の連鎖というライフコースの視点をもって分析する。その結果から、中学校におけるキャリア教育に向けた示唆を得ることを目的とする。

2. 研究方法

協力者3名に半構造化インタビューを行った。主な質問は、これまでに「転機」があったか、「転機」が今の自分にどんな影響を与えているかである。そのデータを SCAT の分析方法に従い、データをセグメント化し、4段階でコーディングした。そのコードを元にストーリーラインを作り、理論化した。分析では、山崎（2012）に倣い、キャリアの発達過程の「転機」に着目する。自身の社会的特性を、捉え直す契機になった出来事（転機）と、「自分らしい生き方」としてどのように統合していったのかを記述した。

表1 協力者3名のプロフィール

	ルーツ	来日年齢	中学卒業年	中学卒業後の進路	現住国	現在の立場
A	ブラジル	5歳	2012年	ブラジル人学校進学	ブラジル	大学生
B	ブラジル	5歳	2012年	帰国し私立高校進学	日本	アルバイト
C	ペルー	日本生まれ	2010年	近隣の私立高校進学	日本	会社員

3. 結果と考察

協力者にはそれぞれ大きな転機が3つあり、日本生まれ日本育ちの日系南米人であるという社会的特性を自分らしい生き方へと統合していく契機となっていた。（表2）

表2 インタビューの結果（下線部はコード）

A	転機1 13歳 中学2年生に進級	転機2 15歳 ブラジル人学校に進学	転機3 24歳 ブラジルに帰国し大学進学
	・ <u>学級中から無視される孤立経験から独りで課題解決する経験の繰り返し</u>	・ <u>母語力不足による自己疎外感を解決するため、校長に勉強をやり直す機会の直談判</u>	・ <u>自己解決は自己成長の機会</u> ・ <u>日系児童生徒のことが理解できるSCの必要性</u>

B	転機1 12歳 中学校に進学	転機2 16歳 帰国し私立高校に進学	転機3 25歳 再来日し工場勤務から転職
	・ <u>氏名を漢字表記に変更し、 外国籍を隠し日本人として 生きる決意</u>	・ <u>アジア人や日本人へのヘ イトクライムの経験</u> ・ <u>ブラジル国籍への誇り</u>	・ <u>緩やかなアイデンティティ</u> ・ <u>日本での経験から日本型撮 影スタジオの設計計画</u>
C	転機1 12歳 中学校に進学	転機2 20歳 4年制大学に編入	転機3 22歳 総合会社に就職
	・ <u>日本語の学習言語能力の不 足と低い自己肯定感に真剣 に向き合う指導の経験</u>	・ <u>スペイン語母語話者の強 みで、母語で習得が進む 英語のリテラシー</u>	・ <u>キャリアアップ思考</u> ・ <u>弱者の経験から部下の気持 ちが理解できる店長</u>

Aは、転機1で「他人に頼ることができないからこそ、自分で何とかしないとイケない」、転機2で「“1からやらしてください”って、自分で言いに行った」、転機3で「自分でこう動いた方が絶対色々とし身に付く」と語り、一人で問題解決できる人間として自己を認識するようになっている。また、転機3で心理学専攻の学生となり「相談できる人が、ちゃんとその子のことを理解できるような、頭の持ち主の人じゃないと難しい」と自分の経験を土台に心理学の専門性を生かして子どもに向き合うという社会的役割に統合し、スクールカウンセラーへと展望を持っている。

Bは、転機1で「私は日本人になりきってた」、転機2で「私はブラジル人だよっていう考えが、こう意識し始めたんですね」、転機3で「外国人だからこそ許される(略)外国人でいいかみたいな」と、葛藤を繰り返しつつブラジル人・外国人としてのアイデンティティを形成している。また、転機3では日本とブラジルでの経験を「ブラジルでの日本語型撮影スタジオ経営」への挑戦に結び付け、職業選択において自分らしさを統合している。

Cは、転機1で「授業についていけない理由、日本語がわからないからだと思わなくなかった」、転機3で「下の気持ちがわかるというか、わかろうと、弱者の気持ちがわかる」という語りから、弱者の辛さがわかる理解者として自己を認識するようになった。また、転機3では、就職先決定の理由に「いろいろ挑戦できる」ことを挙げ、複言語・複文化をもつ自身を多様な社会参画の可能性を求める職業人として統合している。現在は結婚を控え、仕事と家庭を両立したいという新たな展望を持っている。

4. まとめ

3名の青年の語りから、キャリア教育に対し次の3点の示唆が得られた。①勉強や言語ができない状況でも、具体的な役割などを与えて期待し、肯定的な自己像の形成を促すこと。②複言語・複文化を持つことを肯定し、その力が持つ可能性を示し、それを活かすキャリア像を社会的な場面とともに見せること。③日本の長期間の生活で知った葛藤や対立を相対化する場を提供し、社会的弱者としてその経験を社会的な役割として意味づけること。以上を社会参画の現実的な姿として提示することが重要だと考えられる。

【謝辞】

インタビューに協力してくださった方々に、心より御礼申し上げます。

【引用文献】

中央教育審議会(2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」
 山崎準二(2012)『教師の発達と力量形成ー続・教師のライフコース研究ー』創風社